

## L'oncle HANSI の世界 - 「フランスを愛するアルザス」の物語 -

中 本 真 生 子

### はじめに

普仏戦争（1870-71）敗北から第一次世界大戦に勝利するまでの約半世紀の間、フランスは「失われた領土アルザス，ロレーヌ」に対して、ひとつの集団的記憶を保ちつづけていた。それは「アルザス，ロレーヌの人々は今でもフランスを愛しており，彼らはフランスに復帰する日を待ちつづけている」というものである。このようなアルザス，ロレーヌのイメージは文学作品や絵画，彫刻といった形で，あるいは初等教育の授業のなかで繰り返し語られ，その記憶を再生産していった。その結果「アルザス，ロレーヌ」は第三共和政下のフランスにおいて，国民統合のシンボルとしての役割を果たすこととなったが，このイメージが現実のアルザスの姿と大きく異なっていたことは，1918年以降のフランスとアルザスの政治的，文化的対立からも明らかである。しかし第一次世界大戦が勃発した際，フランスが「アルザス，ロレーヌの奪回」を戦争目的として掲げ得た背景には，戦争直前にこのイメージがさらに強化され，人々に確信されるようになっていたという事情があった。この確信をもたらしたのが，「アンシ（おじさん）」ことジャン-ジャック・ヴァルツと，彼が著した風刺画および数冊の絵本である。

Hansi<sup>1)</sup>の名は，現在のフランスではもはや過去のものであり，その業績を知る人は限られているだろう。しかしながら，このアルザス出身の画家（絵本作家）の作品を一度も目にしたことがないという人は，フランスでは逆にほとんどいないのではなからうか。大きな黒いリボン状の帽子（coiffe）をかぶり，白いブラウスとエプロンドレスという民族衣装に身を包んだ少女たちのイラストは，今日でもアルザス地方を表す際に必ずといっていいほど使用されているものである。少女たちの背景には「青く霞む」ヴォージュ山脈，古い石造りの小さな村，切り立った屋根に片足ですくくと立つコウノトリ，といったアルザス地方のシンボルマークがちりばめられている。そして何よりも，屋根にはためく三色旗。ポストカードやパンフレット，ポスター，そして本の表紙等で，彼が描いたアルザスの風景や少女たちは，現在でも広く人々

の目に触れている。またストラスブルやコルマールといったアルザス地方の町では、彼が生み出したキャラクターたちは食器やクロス類、あるいは文房具や人形といったさまざまなグッズとして販売されてさえいる。しかしこの「アンシおじさん」ことジャン-ジャック・ヴァルツが、どのような歴史的背景のもとで、そしてどのような目的でこれら多数のイラストを発表したかについて、思いをめぐらす人は少ないだろう。

ジャン-ジャック・ヴァルツは1873年にコルマールに生まれ、ふたつの世界大戦期を除いて一生をその町で過ごした人物である。画家としては多数の水彩画とエッチングを残し、また後半生はコルマールのウンターリンデン美術館の館長を勤め、その傍らアルザス地方の紋章についての研究も行った。しかし現在も流布している彼の作品の大半は、彼が第一次世界大戦の直前から直後にかけて発表した数冊の絵本と、そこに載せられたイラストである。それらの作品のなかで、彼は美しいアルザスの風景のなかに入り込んだ「野蛮で高慢な」ドイツ人たちを風刺し、また「フランスを愛しつづけている」アルザス人たちの姿を描き出した。これらのアルザスから発信された「フランスを愛するアルザス」のメッセージは、第一次大戦直前のフランスに大きなブームを巻き起こす。おりしも高まる独仏対立のなか、「ルヴァンシュ（対独復讐）」の機運が再び沸き起こり、「フランスの子供たちはみな、彼の絵本でアルザスの歴史を知った」<sup>2)</sup>という状況が現れる。しかし「子供たちに語りかける絵本」というスタイルを取ってはいったものの、フランスで最も熱狂的に彼を支持したのはモーリス・バレスに代表されるようなナショナリストであり、またクレマンソーに代表されるような政治家であった。さらに戦争終結の直後に出された『トリコロールの楽園』と、フランス復帰1周年を記念して出版された『幸福なアルザス』の二冊は、フランス軍によって「解放」され、フランスへの復帰を果たしたアルザスのあふれんばかりの幸福感を描いた作品であり、これらもまたフランスでは熱狂的に受け入れられたのである。

しかし今日の研究からは、当時のアルザスの状況が必ずしも彼が描いたような完全なフランス志向ではなかったことが明らかになっている<sup>3)</sup>。たしかに彼の作品はアルザス地方においても成功をおさめており、また戦争勃発と同時にドイツ軍への徴兵を忌避してフランスへと逃亡した若者もある程度は存在していた。しかしそれは当時のアルザスでは決して多数派ではなく、人数的にはドイツ兵として戦場に赴いた若者のほうが圧倒的に多かったのである<sup>4)</sup>。「アンシ」が描き出し、フランスに紹介したアルザス像は、決して当時のアルザスを正確に反映したものではなかった。そしてそのことを証明するかのように、戦後、再統合をめぐるフランスとアルザスの対立のなかで彼の人気は衰えていく。1951年に彼が死去した時、新聞は「彼はその才能の終焉から35年後にその死を迎えた」という記事を載せたのだった<sup>5)</sup>。

本稿ではジャン-ジャック・ヴァルツの生涯と、彼がHansiのペンネームで発表した作品の軌跡を辿ることによって、彼が描き出したアルザス像を明らかにし、またそれが当時のフランス

に与えた影響について考察する。彼についての研究は、彼の知人であったR. ベローが著した伝記や郷土史家によるいくつかの研究の他には、この時期のアルザスやフランスのナショナリズムを扱った研究書にその名やイラストが取りあげられているが、その作品が持った影響力については正当に評価されているとは言い難い。しかしヴァルツのフランスへの愛国心と彼のアルザス像の形成過程をたどることによって、かつては「典型」と考えられ、熱狂的に受け入れられたアルザス像の「特異性」を、逆に照射することができるであろう。先にも述べたように彼のイラストは現在でも巷にあふれ、またいくつかの作品は近年になって復刊されている。このような彼の作品の現在における「消費」のされかたについても合わせて考えていきたい。

## 1 生い立ち

Hansiの名をフランス（特にパリ）に響かせた一連の作品を考察する前に、それらを発表するまでに至る彼の生い立ちについて簡単にみていこう。

ジャン-ジャック・ヴァルツの父ジャック-アンドレ・ヴァルツは1837年、コルマールで代々大きな精肉店を営むカトリックのブルジョワ家庭に生まれている。若くして家業の手伝いを始めた彼は、1857年から2年間、第二帝政下のパリに精肉店の見習いとして修行に出た。その際多くの美術館や図書館に通いつめた彼は、帰郷後も独学で郷土史や美術の勉強を続けたという。彼は1869年、普仏戦争の直前にコルマールのブルジョワ家庭出身のロザリ・デュナンと結婚し、戦後はフランスからドイツへの国籍変更を受け入れた。

ジャン-ジャック・ヴァルツは1873年2月23日、ヴァルツ夫妻の次男としてコルマールに生まれた。アルザスがドイツ帝国領となってから2年目であり、彼は帝国領アルザスに生まれた第一世代ということになる。しかし一家は「1870年以前のアルザス」が維持され、「移住者」（主にプロイセンからの移民）が注意深く排除されている旧市街に住み、ヴァルツは学校にあがるまで、「昔からそこに住んでいるアルザスの人々以外の人間と接したことはなかった」<sup>6</sup>。そして彼が8歳の時、父アンドレは長年の独学が実ってコルマールの図書館員に任命され、さらに2年後にはかの高名なウンターリンデン美術館の学芸員も兼任することとなる。後に父も、そしてヴァルツ自身もこの美術館の館長を勤めることとなった。

このように、「フランス時代のアルザス」がほぼ完全な形で保存されている地区に育ち、学問を愛する父の影響を大きく受けたヴァルツは、しかし中等教育の途中で完全な「落ちこぼれ」となり、劣等生というレッテルを貼られることとなる。彼が後に述べたところによると、その原因はドイツ人教師への反抗心であった。彼は中等学校（ギムナジウム）に進んではじめて「ドイツ人」（特にプロイセン出身者）の教師や生徒と出会う。彼はそれらの人々の「むくんだ顔に野暮ったい服装、そして軍人のはくようなブーツ……」をあからさまに軽蔑し、「正確な

ドイツ語を話す」ことや、ドイツ人教師とその教育法に対して徹底的に反抗した。彼は授業中に教師の風刺画を書き散らし、それが見つかって没収され罰を受ける、といったことを繰り返し、最終的には退学を余儀なくされたのである。彼はこの少年時代にはぐくんだ反ドイツ的な精神を一生の間抱きつづけることとなった<sup>7)</sup>。

この出来事は彼の父をいたく失望させた。ヴァルツは退学の後、ギムナジウムで唯一才能を認められていた絵画の道に進むことを志すが、父はその夢を危ぶみ息子に織物デザインの勉強を薦めた。当時南アルザスでは、工業都市ミュルーズを中心に織物産業が盛んであり、父は息子に工業デザイナーの技術を身につけさせようとしたのである。彼はデザインの勉強に取り組み、やがて19歳となった1892年、リヨンの機織専門学校へと留学する<sup>8)</sup>。かつてその父がパリに修行に出たのと同様年齢であった。リヨンでの彼は、「コルマルの劣等生がリヨンの優等生になった」と言われるほどめきめきと頭角を現す。2年後には、機織専門学校から美術学校へと移り、彼は絵画を本格的に学び始めた。そこで彼は水彩画やエッチング、版画等を学び、学内コンクールでの入賞も果たす。多くのフランス人の友人に囲まれたこの日々を、彼は後に「このうえもなく楽しい日々だった」と語っている<sup>9)</sup>。しかし1896年に彼は肋膜炎をわずらい、その療養のためコルマルへと帰郷した。そして病気が完治した後、彼は父の言にしたがってコルマル近郊の工場で工業デザイナーとして働くこととなったのである。しかし彼は絵画への情熱を失くしはしなかった。彼は仕事の傍ら絵画サークルに参加し、休日にはスケッチブックを手にヴォージュの山間を歩きまわった。そしてヴォージュの山並みやアルザスの古い町の風景を描いた彼の水彩画は、やがて「最もアルザスらしい風景画」として人々の目に止まりはじめるのである。〔図1〕



〔図1〕

## 2 HANSIの誕生

ヴァルツが工業デザイナーとして働き始めた1890年代末のアルザスには、ひとつの政治・文化運動が吹き荒れていた。ドイツ帝国に対して、アルザスの自治権拡大と地方文化の尊重を求めた「アルザス文化運動」である。1890年代から始まったこの運動は「ドイツ領アルザス」で育った若いアルザス人たちを中心としており、またその名称にも現れているように「アルザス文化」の保護と発展を大きな課題としていた。当時この地方の日常語であったアルザス語は、ドイツ語の一方言として標準ドイツ語の下位に置かれていたが、そのアルザス語での文学作品の発表、あるいはアルザス語での演劇などがこの時期盛んに行われる。美術界もまた例外ではなかった。もともとアルザスの美術界の目は常にフランス、特にパリに向いていたが、この時期はそれに加えて「アルザス」の独自性を強調する絵画、あるいはアルザスの風景を描いた絵画が流行する。そして1896年から工業デザイナーとして働いていたヴァルツも、まずは水彩画を媒介にこの運動に参加していくこととなった。

ヴァルツはこの時期、先にも述べたようにデザイナーとして工場で働きつつ、休日になると近隣の野山を散策し、その風景を主に水彩画に描く日々を送っていた。日曜日になると、「感じのいい、しかし少々人付き合いの悪い、冗談好きな、そして少し背中を丸めた大男」がスケッチブックを手に野山を歩きまわる姿が見かけられたという<sup>10)</sup>。やがて彼は、すでにアルザスでは名の知られた画家であったクライダーとホーネッカーの紹介でストラスブールの絵画サークルに参加するようになる。また彼らはヴァルツを『*La Revue alsacienne illustrée*』誌の運動に勧誘した。これは、やはり芸術家であったシャルル・スパンドレールによって1899年に創刊された自治主義派の雑誌である。この雑誌への参加を期に、ヴァルツは水彩画の他にエッチングや版画の製作もはじめるようになった。その一方で彼は、絵葉書や催し物のプログラム、ダンスパーティーの案内などのデザインも手がけるようになる。初期の作品にはロートレックに影響を受けたような華やかな風俗画が目立っていたが、やがてその題材はヴォージュ山脈の風景画に絞られていき、1905年頃には上ヴォージュのホテル・レストラン協会が彼の絵葉書を一手に扱うようになった<sup>11)</sup>。

このように一方では画家としてのキャリアを積み重ねながら、ヴァルツは徐々に政治運動にも関わり始める。それにつれて、彼の表現方法は絵画とは別の方向にも広がっていった。それは反ドイツ的な風刺画の製作である。アルザスの風景を題材にした水彩画を描き続ける一方で、彼はヴォージュの山間でみかけるドイツ人旅行者のスケッチを始めた。そして1906年、当時ストラスブールで薬剤師の勉強をしていた兄アンドレの紹介を得て、ヴァルツはストラスブール薬剤師協会の会報にドイツ人旅行者を揶揄した数枚の風刺画を掲載する。これらの作品はかなりの評判をよび、これ以降ヴァルツの批判者精神と反ドイツ主義的な傾向はアルザスに広く



〔図2〕

知れ渡ることとなった。なお、彼はこれらの風刺画にはじめてHansiというペンネームでサインを入れている<sup>12)</sup>。〔図2〕

そしてこの風刺画の反響に目をつけた薬剤師協会は同年、ヴァルツの版画10枚に彼のユーモラスな文章を添えた『Vogesenbilder』(ヴォージュの風景)というタイトルのパンフレットを出す。これが、ヴァルツがアンシの名で出した初めての出版物であった。このなかでも特に強調されていたのは、ヴォージュの美しい山中に点在するドイツ人旅行者(登山家)の姿である。彼らは汎ゲルマン主義のシンボルであり、野暮ったい登山服に羽飾りのついた帽子、背には重そうなりュック、手にはアルペンステッキ、そして鷲鼻に丸眼鏡という記号を付与されていた。彼らの服装や登山という習慣はアルザスの人々にとっては非常に珍しく、ヴァルツはそれを視覚化し強調することによって、「われわれ(アルザス人)」とは異質な「彼ら(ドイツ 特にプロイセン人)」という構図を鮮明に描き出した。そして、民族衣装を身につけたアルザスの村人たちが遠巻きに見守るなか、山を目指して歩いていくこの「奇妙な」格好の一群は、「征服者たち」と名付けられたのである。〔図3〕

しかしこのパンフレットにおける「ラインの東側から来た旅行者たち」に対するまなざしはあからさまな敵意に満ちたものではなく、版画に添えられた物語は、彼ら旅行者の無知やそれゆえの失敗を軽やかに笑い飛ばしている。この『ヴォージュの風景』はかなりの人気を博し、その出版はミュルーズの印刷業者に引き継がれ第4刷まで発刊された<sup>13)</sup>。そしてこの作品の成功は、ヴァルツを一気に自治主義運動の旗手へと押し上げる。特にこれ以降、彼は急進的なフランス派として知られたヴェッテルレ神父や、帝国議会議員 J. プライス、D. プリュマンター



Touristes allemands dans un village d'Alsace.

【図3】

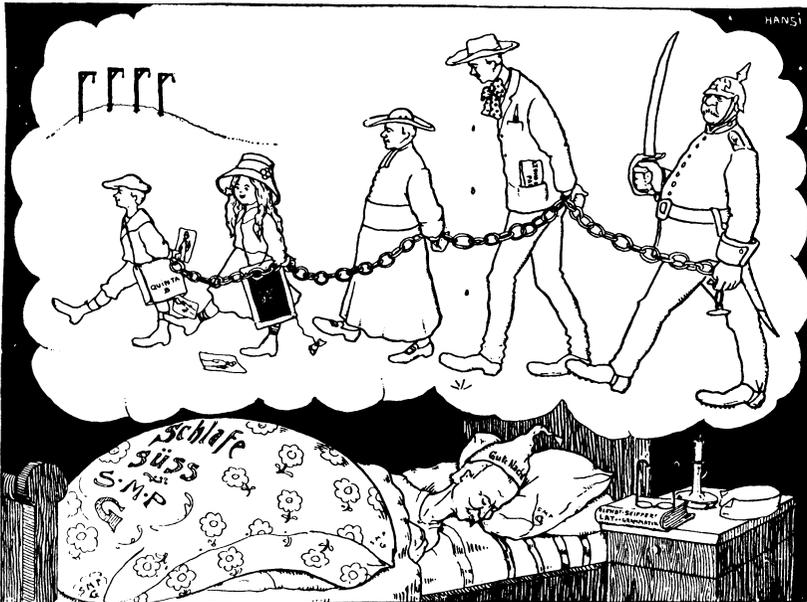
ルらとの親交を深めていった<sup>14)</sup>。また翌1907年、ヴァルトはそれまで描き溜めた水彩画の選集を『Tours et Portes d'Alsace』（アルザスの塔と城門）というタイトルで出版する。この12ページの薄いパンフレットは、そのタイトルの通りアルザスの塔や城門の風景画を集めた「アルザス志向」のものであったが、その序文はフランス文化を礼賛して論争を引き起こしていたコルマールの弁護士フルーランによって書かれていた。さらにこの頃ヴァルトは、ミュルーズにおいて反ドイツ主義をかかげて発行された『Dur's Elsass』の創刊者ツイースリンを紹介される。す

でに反ドイツ的な風刺画を多く発表し、ミュルーズの反ドイツ主義者として名をあげていた彼との出会いによって、ヴァルツは一層急進的な反ドイツ主義へと傾いていった<sup>15)</sup>。翌年の1908年に出された『ヴォージュの風景』の第二版に、ヴァルツは「ホーケーニヒスブルク城の除幕式」というタイトルの絵を付け加える。この城は19世紀末にドイツ皇帝ヴィルヘルム二世の肝いりで修復された、ヴォージュ山中にそびえる中世ドイツの古城であり、ドイツ側はこれを「アルザスのドイツ的なもの」のシンボルとして扱っていた。ヴァルツはこれを冷やかすイラストを追加したのだった。

そして同年、工場を辞めた彼は、やがてHansiの名ををフランスに知らしめることとなる1冊の本を出版する。‘*Der Professor Knatschke*’ (クナチュケ教授)である。この物語はまず*L'Express de Mulhouse*紙に連載され、その人気を当てこんだ出版社が当時としては思いきって1冊の本にまとめて出版したものである。全76ページという、ヴァルツにとっては初めての本格的な本であった。この物語は、クナチュケ教授という「尊大で、鈍感で、自惚れ屋のゲルマン主義者」とその家族(妻エリザ、娘エリカ)を中心に、彼らの考え方や習慣、アルザスに対する傲慢さ(アルザスはドイツであると主張する、あるいはアルザスを田舎としてばかにする等)、フランスに対する対抗意識などを滑稽に書き連ねたものである。彼らには汎ゲルマン主義の典型としての性格が付与され、挿絵では「ドイツらしい」服装が、物語では「ドイツらしい」態度や思考が強調される。特に教授たちがパリへ旅行に行き、「ベルリンだって」と強がってみせたり、料理のひと皿ひと皿の量が少ないと怒ってみたり、かと思うとパリで衣装を買いこんですっかり服装が派手になったりと「おのぼりさん」ぶりを遺憾なく発揮するくだりなどは、痛快ではあるがどこか微笑ましい。このクナチュケ教授には実在のモデルがあり、その人物はゲルマン主義、ドイツ領土拡大主義の急先鋒であった。彼は物語のなかでは徹底的にこけにされている。しかし教授の口からパリのデカダンスを否定させつつ、その文章に添えられた絵で彼を「洗練されていない。鈍い田舎者」として笑い飛ばす、というスタイルなどからは、まだ悪意のみではないユーモアが伺える<sup>16)</sup>。しかしこの本の成功と、さらにこの頃から始まったヴァルツとフランスとのつながりは、ドイツ当局の目を引くに十分であった。この1908年以後、ヴァルツは「危険な反ドイツ主義者」とのレッテルを貼られ、当局のマークを受けることとなる。アンシの誕生は、彼がそれまでの「自治権拡大運動にかかわる日曜画家」から、「急進的な反ドイツ主義者(そして親フランス主義者)」へと変貌する時期と重なっていたのである。

### 3 フランスへの進出

1908年はヴァルツに様々な変化をもたらした年であった。まず前章でみたように、『クナチ  
242 (480)



【図4】

『ユケ教授』が出版され大きな人気を博すと同時に、ドイツ当局から反ドイツ主義者としてマークされる身となる。さらにこの年、彼の作品がクライダーとホーネッカーによってパリの人々に紹介される。それをきっかけに、パリのデラトル社からアルザスの風景を描いた画集を出すことになった。また同時期、アルザス自治主義運動系の雑誌を通じて、ヴァルツはパリのH.フロリー書店および反ゲルマン主義の雑誌『Les Marches de l'Est』と関わりを持ち始める。この雑誌にはモーリス・バレス、アンリ・マシス等そうそうたるナショナリストのメンバーが寄稿していた。こうしてフランスのナショナリストたちはヴァルツの存在を知り、彼らはパリで彼の作品 アルザスの風景画や反ドイツ的な風刺画を絵葉書にしたものを精力的に販売し始める。やがてそこからの収益は、同時期アルザスにおいてヴァルツが新聞に載せたカリカチュアに対して課せられた罰金（500マルク）の資金源ともなった。〔図4〕

こうして「アンシ」のアルザス的、そして反ドイツ的な作品はパリにおいて流通し始める。同時にフランスのナショナリストたち、なかでも特に当時若者に絶大な人気を誇っていたモーリス・バレスは、積極的にこのアルザスの画家に肩入れしていった。周知の通りロレーヌ地方の出身で、ロレーヌとアルザスを「(聖なる)傷口」と呼び象徴化したバレスにとって、「アンシ」は彼の思想をアルザスの側から証明するまたとない人物であった。そしてヴァルツが初めてパリで作品を発表した2年後の1910年には『Gil Blas』紙が「ドイツに抵抗するアルザス」というタイトルで2週間にわたるアンシの風刺画展を企画し、また『L'Illustration』紙が「アンシ アルザスの風刺画家」という記事を書けるほどに、パリにおける彼の知名度と人気は高ま

っていたのである<sup>17)</sup>。

1911年4月、ヴァルツと彼以上に過激な風刺画の書き手であったツイースリンは、デザイン協会の招きでパリへと赴く。そこでヴァルツは自身の絵画や風刺画のパリでの人気を目の当たりにすることとなった。すでに独仏の緊張は再び高まりつつあり、それにつれてフランスでは「失われた領土アルザス、ロレーヌ」の記憶が再生されつつあった。「アンシ」の描く美しいアルザスの風景や反ドイツ的なイラスト、風刺画は、そのような背景のもとで熱狂的にパリの人々に特にナショナリストたちに受け入れられていた。そしてこの年の暮れに、アンシの水彩画はイリュストラシオン紙のクリスマス特集号を飾ることとなったのである<sup>18)</sup>。

そして翌年の1912年、パリのフローリー社は『クナチュケ教授』のフランス語版を出版する。翻訳者はコリー博士(Dr.H.-P.Colli)とされていたが、この人物は実は当時の大統領府官房長官を務めていたH.コリニオンであった。この本のフランスでの出版の政治的背景が伺われるところである。この‘*Professeur Knatschké*’は当時6万部に達し(最終的には10万部)、フランスでのアンシの名を不動のものとした。彼はアルザスにおいて以上にパリで成功をおさめたのである。そしてこれ以降、アンシの名のもとにヴァルツが出版した作品は、それまでの「アルザス向け」のものから明らかに「フランス向け」のものへと変化する。つまりアルザスのゲルマン主義者たちを風刺し、からかって共に笑う、というスタイルから、「フランスを愛し続けているアルザス」をフランスに向けて語る、というスタイルへの歴然とした変化が認められるのである。それはフランスの「ルヴァンシュの文学」<sup>19)</sup>や、パレスに代表される「聖なるアルザス、ロレーヌ」というアルザス、ロレーヌ観への合流ともいえるものだった。

その傾向が明確に現れたのが、同年のクリスマスに合わせてフローリー社から出版された‘*L’Histoire d’Alsace*’(アルザスの歴史)である。彼はこの100ページにおよぶ大きな絵本をまずパリで、そしてフランス語で出版する。またこの本には、「アンシおじさんによる、アルザスとフランスの小さな子供たちへのお話」という副題が付けられており、彼はここではじめて‘*l’oncle Hansi*’(アンシおじさん)と名乗っている。この子供に語り聞かせるような文体と挿絵で構成された物語は、はるか昔、「ケルト人がアルザスに、そしてフランスに住んでいた」頃からはじまっている。ライン川の向こうに住む「野蛮なゲルマン民族」に征服されそうになった(ケルト系の)アルザスの人々は、文明化され洗練されたローマ軍によって救われる。この部分からすでに分かるように、彼がこの本のなかで一貫して主張しているのは、アルザス人がゲルマン起源(つまりドイツ系)ではなく、ケルト起源(つまりフランス系)である、ということである。この考えは、「ドイツ人の集団がアルザスにやってきたのは、1870年以降のことなのである」という一文にも現れている。物語は続けて中世のドイツ支配を「征服、支配」として描き出し、次いで17世紀のルイ14世にはじまるフランス時代を「文明の時代」として称える。それは続くフランス革命、ナポレオン率いるライン軍の記述においても変わらない。

彼は「ライン川をはさんで良きものと悪きものが戦いつづけてきた」と説明し、その間で翻弄されるアルザスを物語る。そして一貫してアルザスはフランスを愛しており、1870年の不幸な戦争以降も、「フランスに戻る日を待ちつづけている」と結ぶ<sup>20</sup>。これはまさに「フランスがイメージしているアルザス」の姿、あるいはフランスがそうであって欲しいと望んでいるアルザスであった。しかし、先にも述べたように当時の、現実のアルザスにおいては、これほどにフランス復帰を主張する声は明らかに少数派であり、ヴァルツの出発点であったアルザス文化運動も、基本的にはあくまでも「ドイツのなかのアルザス」という枠組みを持つものであった。ヴァルツ自身の作品群も、『クナチュケ教授』までは反ゲルマン主義ではあってもこれほど「フランス」を強調するものではない。内容的にも、そしてそもそもの執筆言語からしても、この『アルザスの歴史』はそれ以前の彼の作品とは一線を画するものであったといえるだろう<sup>21</sup>。

ヴァルツのこの「フランス」志向は、翌1913年に再びパリで出された『*Mon village*』（私の村）で一層強まった。この絵本は全32ページと前作よりは小ぶりであり、内容は、「アンシおじさん」の子供時代の思い出である。小学校にあがったとき やさしいフランス語も教えてくれた老先生、正装して教会に行った日曜日、ライン川の向こうからやってくる奇妙な「外国人」の旅行者たち、お祭りの日の賑わい、横暴なプロイセンの憲兵や傲慢な汎ゲルマン主義者たち、そしてヴォージュ山脈の彼方の、夕日に染まるフランスを夢見る子供たち……<sup>22</sup>。こうしてフランスへの憧憬を前面に押し出し、アルザスをプロイセンの「植民地」とまで表現したこの本の出版と、さらに翌年に彼がコルマールで起こしたひとつの事件によって、ついにヴァルツは逮捕された。1914年1月、ヴァルツは友人とともにコルマールのレストランにいた。そこへドイツ人憲兵が入って来て、彼の隣の席に腰を下ろす。ヴァルツは「(憲兵によって汚された)空気を浄化する」ために、彼の椅子の下で砂糖ひとかけに火をつけ燃やした。それは3ヶ月前に起こったサヴェルヌ事件<sup>23</sup>に対するヴァルツの抗議行動であったのだが、これが憲兵の侮辱罪に問われたのである。この「アンシ」の危機に際して、フランスの各紙は一斉に擁護の論陣を張った。『*L'Humanité*』紙は第一面に彼の写真を載せ、またクレマンソー自らが『*L'Homme libre*』紙にアンシ擁護の論説を載せた。「アンシが何をしたというのか？彼は彼自身の国で自由にものを考えただけである……」。この時「アンシ」はまさに自らの身をもって、「粗暴なドイツによって迫害されるアルザス」を体現していたのである。

約3ヶ月間コルマールの監獄に収監されたヴァルツは、7月9日、ライプチヒの帝国高等裁判所にて「アルザスのドイツからの分離を扇動し、また憲兵を侮辱した」かどで18ヶ月の禁固刑を言い渡された。しかし身辺の整理のため一旦コルマールに戻ることを許された彼は、付き添いの警官2人の隙をついて脱走し、国境を超えてまずスイスへ、そしてそこからフランスへ亡命する。そして彼は国境地帯に配置されていたフランス軍第152歩兵部隊に加わった。ま

さに第一次世界大戦勃発の、わずか2日前のことであった。

#### 4 第一次世界大戦と HANSI

第一次世界大戦の勃発時に、フランス軍に加わったアルザスの若者がいたことは先にも触れた。しかしヴァルツほどに熱心に、喜びを持って任務についたアルザス人は少なかったであろう。彼はすでに41歳であったが進んでフランス軍の偵察部隊の先導を勤め、活躍した。青い外套と赤いズボンというフランスの軍服を身につけた、得意げな自画像もいくつか残っている。ドイツ当局の追跡の目をくらすため、パリで反ドイツの宣伝ビラをつくっているという風を装いながら、実際には彼はアルザス南部に侵攻したフランス軍と行動を共にし、ひとつの村がフランス軍の手に落ちるたびに、それを「解放」としてスケッチブックに書きつけた。これが第一次大戦終結直後の1918年12月に緊急出版された '*Le Paradis Tricolore*' (トリコロールの楽園) のもととなる。ヴァルツはキルシュブルク、マスヴォー、オデレン、タンといったヴォージュ渓谷の村々に三色旗が翻り、広場ではフランス兵を住人たちが大歓迎している光景を描き出した。女たちは兵士に食事を供し、子供たちはめずらしそうにフランス兵を取り囲む。兵士たちのなかにはアルジェリア兵や黒人兵の姿もみられる。女の子は髪にトリコロールのリボン結び、男の子はフランス軍の軍帽に似せた帽子をかぶっている。また別のページでは、子供たちは「アルザスを解放するために」命を落としたフランス兵の墓に花を手向けている。そして威張りくさっていたドイツ人たちは、ほうほうの体で逃げ出していくのである。物語を彩るイラストは、旗だけではなくリボンにも、花にも、版画のふち飾りにもふんだんに赤・白・青のトリコロールカラーが使用されている。それらの絵は、フランス軍の侵攻は「進行」であり、彼らによる占領は「解放」なのであるということ、つまりフランスはたしかに「自由、平等、友愛」そして文明の国なのだというイメージをアルザスの人々に強くアピールする側面と、さらにはアルザスの人々はフランスが想像していた通りに、このように喜んでフランス軍を受け入れている、ということフランス側に印象づけるという2つの重大な側面を持っていたと考えられる<sup>24)</sup>。〔図5〕

たしかに戦争の間、フランス当局はアルザスの占領地域に対して細心の注意を払っていた。ジョフレ元帥は1914年11月に、アルザスの伝統、信念、価値観を尊重する旨の声明を発しており、戦争が終わるまで、フランス軍はアルザスに対して「親切で思いやりのあるフランス」、という姿勢を貫いた。小学校に配置され、教師を勤めることとなったフランス人兵士たちは、ドイツ軍のもとで戦っている子供たちの父や兄を悪く言うてはならないと厳しく命令され、また村人たちに対する態度の悪い兵士は前線に送り返された<sup>25)</sup>。一方、戦時中アルザスに駐留したドイツ軍は、アルザス人に対して非常な疑心暗鬼に陥っており、戒厳令の施行やフランス語



【図5】

の完全な禁止、スパイ嫌疑による逮捕や処刑の多発は、アルザスの人々の心を急速にドイツから引き離していた。また官僚や教師といったドイツ派の人々はフランス軍の占領の直前にドイツ領へと逃亡するのが常であり、ヴァルツが描き出した光景は、ある程度は実在していたといえるだろう。たとえそのような、フランス軍を受け入れる住民の姿に「フランス軍が近づくと、誰もがフランスびいきになる。そしてドイツ軍が勝利すると、同じ人々が勝利を祝う鐘を鳴らすのだ」と苦々しい感想を書き残した人物がいたとしても<sup>26)</sup>。

1918年11月、第一次世界大戦は終結を迎え、フランス軍はアルザスの諸都市に次々と入場した。11月18日にはヴァルツの生まれ故郷コルマルにもフランス軍が到着する。ラップ將軍はヴァルツに、部隊の一番先頭を単独で歩くように指示した。三色旗がたなびくなか、人々の熱狂的な歓迎の声を浴びたヴァルツにとって、そこは正真正銘の「トリコロールの樂園」だったであろう<sup>27)</sup>。しかしこのフランスとアルザスの再会は、ヴァルツが信じた「幸福なアルザス」をもたらすはしなかった。フランスへの復帰はアルザスにとってゴールではなく新たな、試練に満ちたスタートだったのである。

## 5 戦後アルザスとHANSI

1918年11月にアルザスの諸都市の住民が示した「熱狂」は、実はフランス復帰を喜んでのものだけではなくたことは、近年のアルザス研究から明らかになっている。4年にわたる戦禍、ドイツ軍による締め付け、厳しい食料不足などが「終わった」という喜びこそが、アルザスの住民たちに三色旗を打ち振らせたのである。事実、フランス軍入場直後の熱狂は長くは続かず、アルザスの人々は政治や文化、特に言語と宗教の問題をめぐるフランスとの対立を深めていくこととなる。また都市部に比べて農村部では、フランス軍に対して沈黙という反応を示しており、さらにドイツ軍から帰還した若者たちのなかには、「フランス軍がアルザスを占領している」と感じる者も少なくなかったという。それに加えてフランスがアルザスに対して取った性急なフランス化政策は、アルザスの人々の心を硬化させていった。結局のところ、ヴァルツのような根っからのフランス派は、アルザスにおいてはあくまでも少数派だったのである。

フランス当局は戦争終結の直後から、それまでのアルザスに対する「思いやりのある」政策を一変させる。アルザス地方議会の無視にはじまりドイツ系住民の強制退去、公用語のフランス語への転換、小学校におけるフランス語での授業の強制、行政機関や法律のフランスへの一体化といったフランス化政策が、戦後1年のあいだにアルザス地方に吹き荒れた。それは約半世紀の間に「ドイツ化」が進んだアルザスをフランスに引き戻し、アルザスの人々を「フランス人」とするための政策であったといえよう<sup>28)</sup>。ドイツ時代にアルザスが獲得していた地方自治権はそのほとんどが廃止され、アルザスはフランスの「極度の中央集権体制」に組み込まれた。また、特に学校や公共の場でのフランス語の強制は、アルザスの人々に多大な苦痛と屈辱を与えることとなる。ヴァルツのようにフランス語を使いこなせる人間は、当時のアルザスにはそう多くはいなかった。その他にも4年にわたって戦場となったアルザス地方には、インフラや基幹産業の破壊、物資不足、また通貨のマルクからフランへの切り替えによる混乱等の様々な問題がひしめいていた。そのなかで人々は、諸々の問題に対処せず、ひたすらフランス

化に重点を置くフランスに対して不満を募らせていく。1919年の春には、すでに反フランスを叫ぶデモやストライキが各地にみられた。このような行動は、やがてアルザスの「自治権」を求める運動として戦間期を通じて繰り返されることとなる。

このようなフランスとアルザスの対立を、ヴァルツはどのように見ていたのだろうか。彼は1919年のクリスマスに、再び1冊の絵本をフローリー社から出版した。'L'Alsace Heureuse'（幸福なアルザス）と題されたこの本は、フランス兵の到着により目覚めた眠り姫（アルザスの民族衣装を身につけている）を描いた扉絵から始まっている。続いて彼は1912年にはじまる彼とドイツ当局との戦い、脱走とフランス軍への参加、そして戦争の間アルザスを襲った恐るべき戦禍の物語を簡潔に繰り返し、その後本の残り3分の2を使って、ひたすらフランス軍がどのようにアルザスの村を、町を「解放」していったかを延々と繰り返す。それぞれの町の特徴がうまく捉えられ、フランス軍の入場と翻える三色旗、フランス兵と共に行進し、あるいは彼らと抱き合うアルザス女性の姿が繰り返される。コルマル入場の場面では、歩兵部隊の先頭を一人歩くフランス軍服姿のヴァルツが描かれ、その周りを三色旗の小旗を手にした子供たちが取り囲んでいる。それはヴァルツにとって生涯最高の栄光の日であった。また彼は要所所でアルザスを「取り戻す」ためにどれほどの犠牲をフランス軍が払ったかを強調し、将軍たちの肖像画や三色旗が飾られた墓地のイラストを挿入している。この本のなかでヴァルツはあくまでも、フランス復帰はアルザスにとって最上の喜びなのだという姿勢を崩さず、フランスに反感を持つ人々を暗に「恩知らず」と非難しているようである。そして彼は本の最後に「1919年12月8日、フランスのコルマルにて」（下線部筆者）と署名したのだった<sup>29</sup>。

この本もわかるように、ヴァルツはその後フランスびいきの立場を一貫して崩すことはなかった。彼はさらに1921年には'Le Voyage d'Erika en Alsace française'（エリカのフランス領アルザスへの旅）を発表している。これはクナチュケ教授の娘エリカがフランスとなったアルザスを訪れる、という設定の短い物語であるが、そこでヴァルツは「ドイツはアルザスとフランスの間に溝ができるのを待っている」つまりドイツはアルザスをあきらめてはおらず、常にアルザスを再び奪取しようと狙っているのだ、と強調している。反フランス的な行動や自治主義の運動はドイツの思うつぼである、というのがヴァルツの生涯変わらぬ主張であった<sup>30</sup>。

しかしこのような彼の主張は、もはやアルザスで支持を集めることはなかった。あまりにも単純化されたその主張は、フランスの極度の中央集権化や現実のアルザスが直面していた様々な問題をあまりにも無視していた。フランス側もまた、頑強に抵抗を続けるアルザスを前に、もはやアンシの作品に夢みることも、期待をよせることもなくなっていた。アルザスが無事回復され、逆にそのことによって「フランスを待ちつづけるアルザス」のイメージが壊された時、フランスにとってのアンシの役割は終わったのである<sup>31</sup>。第一次大戦後のヴァルツは、ウンターリンデン美術館の職員を務める傍ら水彩画や風刺画を書きつづけてはいたが、それらは

やがて彼の本名、ジャン-ジャック・ヴァルツの名でなされるようになった。彼はその他にアルザス地方の紋章研究なども手がけ、戦間期を通じて一種のカリスマ的存在ではありつづけたが、しかし二度と大きな影響力を持つには至らなかった。Hansiの時代は、やはり第一次世界大戦の終了とともに終わっていたのである。

## おわりに

ジャン-ジャック・ヴァルツがアンシの名で一世を風靡したのは、第一次世界大戦前後の約10年間にすぎない。その間彼は、フランスがイメージしていた「アルザス」をまさに体現する存在であった。しかし彼は現在では「過激なフランス派」<sup>32)</sup>に分類されるアルザス内の少数派であり、彼が描き出した「フランスを愛するアルザス」は、アルザスの現実ではなかったのである。彼の「アルザス」が、フランスが望んだ「アルザス」にあまりにも合致していたところに、フランス復帰以降の「イメージと現実の衝突」<sup>33)</sup>の一因をみることもできよう。さらに彼が描く「フランスのアルザス」という楽園が、戦時中のアルザスにおけるフランスへの期待を育成し、それゆえに戦後のアルザスでは現実のフランスの政策に対する失望や不満が一層強く出たとみることも可能である。アンシの作品は、短い期間ではあるが、それだけの力を有していたのである。

しかし現在において、彼の作品がこの時期に与えた影響を評価する声は少ない。第二次世界大戦直後に『アルザス文化論』を著したF. オッフエは、その著書のなかで多数のアルザス人作家、芸術家の名を挙げながらも、アンシ（あるいはヴァルツ）については一言も言及していない。またこの時期のアルザスについての研究のなかでも、彼の存在は「急進的な反ゲルマン主義の風刺画家」として触れられる程度であり、彼が果たした役割について十分な検証が行われているとは言い難い。さらに1980年代から90年代にかけて復刊された彼の代表作は、かつてフランスで好評を得たものが中心であり、またアルザス地方でこそ見かけるが、それらをフランスの他の地方でみることはほとんどない<sup>34)</sup>。一方アルザスにおけるこの「地元の有名人」再評価の試みも、「彼はフランス派と思われているが、実はアルザスこそが彼のなかに第一にあったのだ」<sup>35)</sup>といういかにも苦しい釈明や、「彼は同時代のアルザスの人々の心がわからなかったのか？ギムナジウム時代のドイツ人教師への反発が彼の一生を縛ったのであろうか」<sup>36)</sup>といったトラウマ説まで、彼の極度のフランスびいきを何とか取りつくるおうとしている状態である。しかし本稿でみてきたように、第一次世界大戦前後のアルザスと、そして特にフランスにおいて彼が果たした役割は非常に大きなものであった。彼の絵本はフランスが思い描いた通りのアルザス像を描き出し、また彼の風刺画は「彼ら」野蛮なドイツ人とは違う「われわれ」アルザス人　フランスとの繋がりによって、より洗練された　という意識と連帯感をアル

ザスにもたらしたがゆえに人気を博した。また本人に関する研究こそ少ないが、逆にこの時期のアルザス、あるいはフランスのナショナリズムを扱う書物には、現在でもしばしば彼のイラストが使用されている<sup>37)</sup>。その意味では、彼の作品は未だに（かつてとは違う意味ではあるが）有効性を失ってはいないともいえるだろう。最後に付け加えるなら、ヴァルツの極度のフランス志向は、当時のアルザスにおいて行われた「ドイツ国民化」の教育に反発し、それゆえドイツという国民国家にアイデンティファイすることができなかった彼が、その代償行為として激しく「フランス人」になることを求めた、と理解することも可能ではないかと思われる。この点についてはさらなる考察が必要であるが、彼の作品が今、郷土を彩る回顧趣味としてではなく、アルザスという「国境」の地において、しかも国民化といううねりのなかで描かれものとして読み直される必要があることは確かであろう。

#### 注

- 1) 基本的にアンシと発音されているが、アンジ、あるいはドイツ語風にハンシと呼ばれることもある。
- 2) R.Perreau, *HANSI ou L'Alsace Révélée*, Paris, 1964. p. 10.
- 3) A. Wahl, J-C. Richez, *L'Alsace entre France Et Allemagne*, Paris, 1993. J-M. Mayeur, Une mémoire-frontière: l'Alsace, dans *Les lieux de mémoire, La Nation II*, ed. P. Nora, Paris, 1986. 等参照。
- 4) 第一次世界大戦期にフランス軍に加わったアルザス人は2～4万人であったが、一方では20万人以上の若者がドイツ軍に参加している。
- 5) R.Perreau *op. cit.*, p. 129.
- 6) R. Perreau, *op. cit.*, p. 38. P-M. Tyl, *le grand livre de l'oncle HANSI*, Paris, 1982,
- 7) *Ibid.*, pp. 39-41. p. 8. ベローは彼のこの「ドイツ嫌い」を、彼の家庭で生まれたものとしている。しかし彼の兄アンドレはギムナジウムを終え、さらに進学していることから、いちがいに家庭の問題と捉えることはできないであろう。
- 8) 前年の1891年に、アルザスとフランスの往来を妨げていた、悪名高い「旅券条項」が廃止されていた。
- 9) R. Perreau *op. cit.*, p. 42.
- 10) P-M. Tyl, *op. cit.*, p.8.
- 11) P. Steinmann, R. Candir, *HANSI, à travers ses cartes postales, 1895-1951.*, Mulhouse, 1996. 参照。
- 12) これは彼の本名のドイツ語形である Hans-Jacob (Iacob)の短縮形である。このペンネームは最初から「反ドイツ」を背負っていた。
- 13) 後には限定2万部のカラー版も出版されている。R.Perreau *op. cit.*, p. 52.
- 14) これらの人物は、第一次大戦が始まるとフランスに亡命し、1915年にフランス政府が創設した「アルザス、ロレーヌ会議」の数少ないアルザス人メンバーとなる。ウージェーヌ・フィリップスは彼らに対して、その著書の中で「彼らはアルザスの世論など代表してはいない」と述べている。（『アルザスの言語戦争』白水社、1994年、284ページ）
- 15) Ph. Dollinger, *op. cit.*, p. 460.

- 16) HANSI, *Professor Knatschké*, Paris, 1912(1995), 参照。
- 17) *L'illustraion*, 30 juillet 1910. 彼のカリカチュア 2 点が紹介されている。
- 18) *L'illustration*, 24 décembre 1911. (クリスマス特集号)。4 ページにわたって、水彩画 10 点 (カラー 6 点, 白黒 4 点) とカリカチュア 1 点 (カラー) が掲載され、バレスが解説を寄せている。ただ、バレスはロレーヌとアルザスについて語るのに熱中するあまり、Hansi の絵についてはほとんどコメントしていない。ヴァルツはそれを不満に感じたという。R.Perreau *op. cit.*, p. 84.
- 19) 1871 年の敗戦によって生まれ、後の「対独復讐」の世代を生み出した文学。敗戦とアルザス、ロレーヌの割譲を語り、いつの日かこの領土を取り戻そうと主張した。
- 20) L'Oncle HANSI, *L'Histoire d'Alsace*, Paris, 1912(1995), 参照。
- 21) ちなみにドイツ当局は、この本がドイツを侮辱しているとして 900 マルクの罰金を課している。
- 22) L'Oncle HANSI, *Mon Village*, Paris, 1913(1988), 参照。
- 23) 1913 年 10 月、サヴェルヌに駐留していたドイツ人中尉が、アルザスの若者数人を「ごろつき」呼ばわりし、フランス国旗を侮辱したため殴られた。アルザス人の若者は逮捕されたがドイツ人中尉はほとんど罰を受けなかったため、アルザスの各地で抗議の声があがった。この事件により、アルザスのドイツに対する感情は急速に悪化した。
- 24) L'Oncle HANSI, *Le Paradis Tricolore*, Paris, 1918(1993), 参照。ただしこの本が印刷にまわった時点ではフランスはまだ決定的な勝利をおさめてはならず、この本の最終ページは、遠くストラスブルの大聖堂にフランス国旗がはためく光景を夢見るフランス兵たちの姿が描かれている。また実際フランス軍が支配下においた町や村が「楽園」であったかという、そうともいえない。G. Zink や E. Rossignol の子供時代の回想は、緊張に満ちたフランス軍支配下の村の生活を垣間見せてくれる。(G. Zink, *Une enfance à Hagenbach*, Paris, 1995. E. Rossignol, *Une enfance en Alsace, 1907-1918*, Paris, 1990.)
- 25) S. Harp, *Learning to Be Loyal*, Dekalb, 1998, p. 167.
- 26) Ph. Husser, *Un Instituteur Alsacien,; Entre France et Allemagne, journal, 1914-1951*, Paris, 1989, pp. 143-150.
- 27) この時彼はレジオン・ドヌール勲章を授与されている。
- 28) 拙稿「ドイツ国民からフランス国民へ」(西川長夫, 渡辺公三編『世紀転換期の国際秩序と国民文化の形成』柏書房, 1999 年, 所収) 参照
- 29) L'Oncle Hansi, *L'Alsace Heureuse*, Paris, 1919 (1990), 参照
- 30) Hansi, *Le Voyage d'Erika en Alsace française* ( *Professor Knatschké*, 1995, 所収) 参照。
- 31) しかし一方で「アンシおじさん」がアルザスの子供達にフランス語の優等賞を授与している写真と記事が、*L'illustraion*, 25 juillet 1925 にみられる。この前年の 1924 年にアルザスはエリオ首相の「アルザス同化宣言」に対して激しい反対運動を繰り広げた。その事件後のアルザスとフランスとの「和解」を強調するために Hansi が持ち出された、という観がある。
- 32) Ph. Dollinger, *op. cit.*, p. 460.
- 33) 戦後アルザスでは、フランスの国民統合の象徴であったアルザスのイメージと、現実のアルザスとが衝突し、軋轢を引き起こすこととなった。拙稿「アルザスと国民国家」(『思想』887 号, 1998 年) 参照。
- 34) *Mon Village*, (1988), *Tours et Portes d'Alsace*, (1989), *L'Alsace Heureuse*, (1990), *Le Paradis Tricolore*, (1993), *L'Histoire d'Alsace*, (1995), *Professor Knatschké*, (1995) など。その一方で、現在の絵葉書等のイ

ラストに、彼の反ドイツ的な風刺画が使われることはほとんどない。また、アルザスのリックヴィルという観光村には、アンシの小さな記念館が建てられている。

35) P-M. Tyl, *op. cit.*, p. 7.

36) P. Steinmann, R. Candir, *op. cit.*, p. 17.

37) J-J. Becker, S. A-Rouzeau, *La France, La Nation, La Guerre : 1850-1920*, Paris, 1995. がよい例である。直接アルザスを扱っているのではないこの書物が、アンシのイラストを表紙に使用していることは象徴的である。

( Maoko Nakamoto, 日本学術振興会特別研究員 )